



大泉小だより

令和4年10月31日
練馬区立大泉小学校

真球を追求する

校長 佐々木 秀之

霜降（10月23日）を過ぎ、秋も酣。先週は10月だというのに真冬並みの寒さを感じる日がありました。しかし、校庭からは元気に遊ぶ子供たちの声が聞こえてきます。

9月から10月にかけて、世界バレー2022が開催されました。11月にはワールドカップ2022がカタールで開催されます。まさにスポーツの秋といったところでしょうか。

*

バレーボールやサッカーボールは、とにかく真ん丸、真球に近付けようとして開発され、現在のようになるまで様々な歴史がありました。

初めは12枚ないしは18枚の細長い革で構成されるボールが使われ、1960年代になると、黒い五角形の皮12枚、白い六角形の20枚というおなじみの「サッカーボールらしい」サッカーボールが登場します。これは、白と黒に塗られたのは、テレビ放映が始まり、白だけのボールは画面でどこにあるのか認識しづらかったからです。表面を覆う素材に、本物の革を使っていた時代は雨が降ったらそれはもう大変でした。水をたっぷり吸い込んだ革のボールはとんでもない重さになります。ヘディングなんてしようものなら、こっちの身体がおかしくなってしまいます。現在では軽くて加工のしやすい人工皮革製のボールとなり、表面には凹凸があり、正確に飛ぶように工夫されています。

バレーボールも長い間、18枚の細長い革で構成されるボールでした。2008年からは、国際バレーボール連盟から「ラリーが続くボールを作ってほしい」と依頼された日本のメーカーが、人工皮革を使ったバレーボールを完成させます。そのバレーボールは曲線部分の多いパーツが螺旋（渦巻）状に貼り合わされ、以降、このバレーボールが世界的主流になっています。サッカーボールと同じように正確に狙ったところに行くよう、表面には凹凸があります。

*

「どうすれば真球に近いボールを作ることができるのだろう」「どうすれば選手が思いどおりに操れるボールになるのだろう」という技術者たちの疑問や追究が現在のサッカーボールやバレーボールを作り上げたのだと思います。私たちを魅了する一流選手たちの技術は、一流技術者たちのたゆまぬ追究によって支えられているとも言えます。

何かを追究している子供の表情は、言葉に表せないほど素晴らしいものです。算数・数学がねらいとしていることは、上のサッカーボールの開発のように「創造性」の基礎を培うことです。「どうしてそうなるんだろう」「何か秘密があるに違いない」という疑問を追究し、「分かった」「できた」という学習の本来の楽しさを味わわせるため、「本当の答えを子供たち自身が見付ける授業づくり」を目指してまいります。